

八条三坊内には、七条町と八条院町がありました。七条町は七条大路に沿って開け、多くの商人・職人が住んでいました。酒屋や金貸しも多かったといわれています。また、八条院町は、八条三坊の南東部の4町以上を占めていた八条院障子内親王(鳥羽天皇皇女)の邸宅の跡地に造られました。いろいろな職人や商人が住んでいたことが『東寺百合文書』によってわかります。

平安京の周辺部には、鎌倉時代の遺跡がいくつかあります。

伏見区醍醐の栢社遺跡では、平安時代後期に建立された八角円堂と、東大寺大仏殿の再建を指揮した重源の手になる鎌倉時代の方形堂が見つかっています。ここからは平・肘木や壁材などの建築部材がたくさん出土しました。

同じく伏見区の久我東町遺跡は、大きな主要となる建物と、それに付属する建物数棟が、幅の広い濠に囲まれています。戦乱に備えた環濠集落のひとつと考えられます。鎌倉時代の後半代が最盛期で、14世紀の中頃に廃絶します。



久我東町遺跡の建物と西側の濠(北から)

また、探題の置かれていた六波羅の地域では今までに何度も調査が実施されていますが、現状では「六波羅探題」に関するはっきりした遺跡はみつかりません。

民衆の時代 これまで特権階級が独占していた感のある宗教や芸術などを、あらゆる階層の人々が共有することになります。この時代に、謡や踊の民衆芸能が育まれてがて能に発展していきます。

新しい考え方の仏教が生まれ、法然、親鸞、日蓮、一遍などのわかりやすい「おしえ」は、人々に広く染み透っていきます。また栄西や道元によって禅宗が広まり、建仁寺、東福寺、南禅寺などの寺院が建立されます。

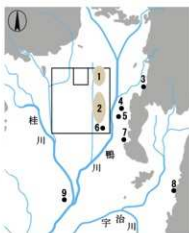
東福寺は鎌倉時代の終わり頃に火災・戦災で総ての建物を失っており、現在の三門は室町時代に建てられたものです。解体修理の際に行なわれた発掘調査で創建時と同じ位置に三門が再建されたことがわかりました。また、その後の調査で、創建時の鐘楼・経蔵および回廊などをみつけています。

町の変化 左京に人々が集中す

ようになると、道路の上にも民家が建ち並ぶなど、しだいに条坊制は崩れていきます。

そして、京都の町は室町通を南北の軸として徐々に四条通と六条通の間の「下の町」と二条通以北の「上の町」との大きなまとまりに集約され、商工業の中心地としてさらに発展をとげていきます。

一方、二度にわたる元寇で大きな経済的負担をかかえた鎌倉幕府は、さらに何度も発生した災害などのためその威信を急激に失い、しだいに人々の心が幕府から離れていきます。こうした背景のもとに後醍醐天皇が天皇制の復権を謀ります。再び戦乱が起こり、正慶二年(1333)、鎌倉幕府はここに幕を閉じます。(鈴木 廣司)



遺跡位置図 1上の町 2下の町 3南禅寺 4建仁寺 5六波羅 6七条町・八条院町 7東福寺 8栢社遺跡 9久我東町遺跡



左京八条三坊三町で出土した鐘の鑄型